

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平10-110129

(43)公開日 平成10年(1998)4月28日

(51)Int.Cl.^a
C 0 9 D 11/02
B 4 1 J 2/01
B 4 1 M 5/00
C 0 9 D 11/10

識別記号

F I
C 0 9 D 11/02
B 4 1 M 5/00 E
C 0 9 D 11/10
B 4 1 J 3/04 1 0 1 Y

審査請求 未請求 請求項の数 7 O.L (全 7 頁)

(21)出願番号 特願平8-265719

(22)出願日 平成8年(1996)10月7日

(71)出願人 000222118
東洋インキ製造株式会社
東京都中央区京橋2丁目3番13号

(72)発明者 佐武 順
東京都中央区京橋二丁目3番13号東洋イン
キ製造株式会社内

(72)発明者 楠木 久嗣
東京都中央区京橋二丁目3番13号東洋イン
キ製造株式会社内

(72)発明者 上村 敏文
東京都中央区京橋二丁目3番13号東洋イン
キ製造株式会社内

最終頁に続く

(54)【発明の名称】 インクジェット用記録液

(57)【要約】

【課題】 安定な分散性を有し、ノズルでの吐出安定性の
良好な水性インクジェット用記録液の提供。

【解決手段】 水性の液体中に有機顔料を分散してなるイ
ンクジェット用記録液において、該有機顔料が、スルホ
ン酸との反応性を有さない溶剤中に有機顔料を分散し、
しかるのちスルホン化剤により処理した処理顔料、また
は顔料の粒子内部に実質的にスルホン酸基を有さず、顔
料の粒子表面にスルホン酸基を有する処理顔料であるこ
とを特徴とするインクジェット用記録液。

【特許請求の範囲】

【請求項1】水性の液体中に有機顔料を分散してなるインクジェット用記録液において、該有機顔料が、スルホン酸との反応性を有さない溶剤中に有機顔料を分散し、かかるのちスルホン化剤により処理した処理顔料であることを特徴とするインクジェット用記録液。

【請求項2】水性の液体中に有機顔料を分散してなるインクジェット用記録液において、該有機顔料が、顔料の粒子内部に実質的にスルホン酸基を有さず、顔料の粒子表面にスルホン酸基を有する処理顔料であることを特徴とするインクジェット用記録液。

【請求項3】スルホン酸との反応性を有さない溶剤が、活性プロトンを有さないことを特徴とする請求項1または2記載のインクジェット用記録液。

【請求項4】スルホン酸との反応性を有さない溶剤が、N-メチル-2-ピロリドンまたはスルホランであることを特徴とする請求項1または2記載のインクジェット用記録液。

【請求項5】スルホン化剤が、スルホン化ビリジン塩またはスルファミン酸であることを特徴とする請求項1ないし4いずれか1項に記載のインクジェット用記録液。

【請求項6】処理顔料のレーザ散乱法により測定した平均粒径が10～150nmであることを特徴とする請求項1ないし5いずれか1項に記載のインクジェット用記録液。

【請求項7】処理顔料を固形分で0.1～10重量%含むことを特徴とする請求項1ないし6いずれか1項に記載のインクジェット用記録液。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、分散安定性に優れ、ノズルでの吐出安定性の良好なインクジェット用記録液に関する。

【0002】

【従来の技術】従来よりインクジェット用記録液としては、特開昭53-61412号公報、特開昭54-89811号公報、特開昭55-65269号公報に開示されているように、酸性染料、直接染料、塩基性染料等の水溶性染料をグリコール系溶剤と水に溶解したものがよく用いられている。しかし、水溶性染料としては、記録液の安定性を得るため、水に対する溶解性の高いものが一般的に用いられており、インクジェット記録物の耐水性が悪く、水をこぼしたりすると容易に記録部分の染料のにじみを生じるという問題があった。

【0003】このような耐水性の不良を改良するため、特開昭56-57862号公報に開示されているように、染料の構造を変えたり、塩基性の強い記録液を調製することが試みられている。また、特開昭50-49004号公報、特開昭57-36692号公報、特開昭59-20696号公報、特開昭59-146889号公

報に開示されているように、記録紙と記録液との反応をうまく利用して耐水性の向上を図ることも行われている。これらの方針は、特定の記録紙については著しい効果をあげているが、記録紙の制約を受けるという点で汎用性に欠け、特定の記録紙以外を用いた場合は、水溶性染料を使用する記録液では記録物の充分な耐水性が得られないことが多い。

【0004】また、耐水性の良好な記録液としては、油溶性染料を高沸点溶剤に分散しない溶解したもの、油溶性染料を揮発性の溶剤に溶解したものがあるが、溶剤の臭気や溶剤の排出の問題があり、環境上好ましくない。また、大量の記録を行う場合や装置の設置場所によっては、溶剤回収等が必要になるという問題がある。そこで、記録物の耐水性をよくするために、水系媒体に顔料を分散した記録液の開発が行われている。

【0005】しかし、顔料は、染料と異なり微小粒子として分散させることおよび分散状態を安定に保つことが非常に困難である。一方、インクジェット用の記録液においては、プリンターの高解像度化につれノズル径が細くなってきており、これに伴い顔料の粒子径も微細化する必要が生じている。また、オーバーヘッドプロジェクター等の透明基材への画像形成においても染料並みの透明性に対する要求があり、顔料の発色の観点からも微細化が要求されている。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】本発明の目的は、上記従来の問題点を解決し、安定な分散性を有し、ノズルでの吐出安定性の良好な水性インクジェット用記録液を提供することにある。

【0007】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、水性の液体中に有機顔料を分散してなるインクジェット用記録液において、スルホン酸との反応性を有さない溶剤中に分散したのちスルホン化剤により処理した処理顔料を用いることにより、安定な分散性を有し、ノズルでの吐出安定性の良好な水性インクジェット用記録液が得られることを見出し、本発明に至った。スルホン化剤により有機顔料の表面を処理してなる処理顔料は、顔料の粒子表面にスルホン酸基を有していると考えられ、処理された顔料表面の働きにより水への分散性の向上と微小化が可能となる。

【0008】すなわち、本発明は、水性の液体中に有機顔料を分散してなるインクジェット用記録液において、該有機顔料が、スルホン酸との反応性を有さない溶剤中に有機顔料を分散し、かかるのちスルホン化剤により処理した処理顔料であることを特徴とするインクジェット用記録液に関する。また、本発明は、水性の液体中に有機顔料を分散してなるインクジェット用記録液において、該有機顔料が、顔料の粒子内部に実質的にスルホン酸基を有さず、顔料の粒子表面にスルホン酸基を有する

処理顔料であることを特徴とするインクジェット用記録液に関する。

【0009】本発明に用いられる有機顔料としては、トルイジンレッド、トルイジンマルーン、ハンザエロー、ベンジンエロー、ピラゾロンレッドなどの不溶性アゾ顔料、リトルレッド、ヘリオボルドー、ピグメントスカーレット、パーマネントレッド2Bなどの溶性アゾ顔料、アリザリン、インダントロン、チオインジゴマルーンなどの建染染料からの誘導体、フタロシアニンブルー、フタロシアニングリーンなどのフタロシアニン系顔料、キナクリドンレッド、キナクリドンマゼンタなどのキナクリドン系顔料、ペリレンレッド、ペリレンスカーレットなどのペリレン系顔料、イソインドリノンエロー、イソインドリノンオレンジ、などのイソインドリノン系顔料、ビランスロンレッド、ビランスロンオレンジなどのビランスロン系、チオインジゴ系顔料、縮合アゾ系顔料、ベンズイミダゾロン系顔料、フラバンスロンエロー、アシルアミドエロー、キノフタロンエロー、ニッケルアゾエロー、銅アゾメチエンエロー、ペリノンオレンジ、アンスロンオレンジ、ジアンスラキノニルレッド、ジオキサジンバイオレット等が例示できる。

【0010】なかでも、キナクリドン系顔料、フタロシアニン系顔料、ベンズイミダゾロン系顔料、イソインドリノン系顔料およびキノフタロン系顔料からなる群より選ばれる少なくとも1種の有機顔料を用いることが耐光性等の点から好ましい。有機顔料は、微細な粒子のものが好ましく、平均粒径10～150nm（レーザ散乱法による測定値）のものが良好である。

【0011】本発明に用いられるスルホン酸との反応性を有さない溶剤は、有機顔料が不溶解または難溶解な溶剤であり、活性プロトンを有さないもの、特にN-メチル-2-ピロリドンまたはスルホランが好適である。スルホン酸との反応性を有さない溶剤は、有機顔料の溶剤による濡れおよび有機顔料のほぐれ状態を維持し、有機顔料をスルホン化剤で良好に処理するためには、有機顔料の3～200重量倍用いることが好ましい。溶剤の量が有機顔料の3重量よりも少ないと、有機顔料が凝集状態のまま処理される可能性が高く、微小な粒子が得られにくい。一方、200重量倍よりも多いと、スルホン化剤の反応性に悪影響がでたり、後の溶剤の除去、洗浄処理が多大で顔料の回収工程が大変になる。また、有機顔料の実質的な処理量が少なくなる。

【0012】本発明に用いられるスルホン化剤としては、スルホン化ビリジン塩、スルファミン酸、アミド硫酸、フルオロ硫酸、クロロ硫酸、三酸化硫黄、発煙硫酸、硫酸等が挙げられ、なかでも、スルホン化ビリジン塩またはスルファミン酸が好適である。スルホン化剤は、単独または2種以上を混合して用いることができる。スルホン化剤による処理は、有機顔料をスルホン酸との反応性を有さない溶剤に分散し、スルホン化剤を添

加したのち60～200°Cに加熱し、あるいは60～200°Cに加熱したのちスルホン化剤を添加し、0.5～5時間攪拌することにより行う。攪拌は、予めハイスピードミキサー等で高速攪拌し、スラリー状としたのち、穏やかな攪拌に移行してもよく、高速の攪拌を継続しながら加熱処理を行ってもよい。また、加熱処理後にはじめて、高速の攪拌を行ってもよい。

【0013】加熱処理した後、顔料のスラリーから、スルホン酸との反応性を有さない溶剤および残留するスル

10 ホン化剤を取り除く。取り除きは、水洗、限外濾過、逆浸透等の方法、遠心分離、濾過等を繰り返して行う。処理顔料のレーザ散乱法により測定した平均粒径は、10～150nm、さらには10～100nmであることが好ましい。このような粒径の処理顔料を用いると、記録液の製造における濾過操作が容易であり、記録液を保存した場合に経時での顔料の沈降も少ない。処理顔料は、インクジェット用記録液100重量部中に固形分で0.1～10重量部の範囲で含まれることが分散性の点で好ましい。

20 【0014】スルホン化処理を行った処理顔料は、10～40重量%程度の濃度になるように水性の液体中に添加してそのまま、あるいは通常の分散を短時間行うことにより、顔料の乾燥工程を経ずに、容易に水性顔料分散体とすることができます。この水性顔料分散体は、分散剤の添加をしなくとも良好な分散性を示す処理顔料微粒子の分散体であるため、単に印字に適する濃度に希釈し、必要に応じてさらに添加剤を加え、濾過することにより、インクジェット用記録液とすることができるが、さらに分散剤等を用い分散機による分散を行い、安定で定着性の強いインクジェット用記録液とすることが好ましい。サンドミル等の通常の分散機でさらに分散を行うと、顔料が微細であり、安定した分散状態のインクジェット用記録液が、分散時間を多くかけることなく短時間でかつ容易に得られる。

30 【0015】インクジェット用記録液の製造には、サンドミル、ホモジナイザー、ボールミル、ペイントシェーカー、超音波分散機、高圧の室内にてキャビテーション効果で分散する分散機等を用いることができる。また、混合攪拌は、通常の羽を用いた攪拌機による攪拌のほか、高速の分散機、乳化機等により行うことができる。

40 【0016】本発明のインクジェット用記録液は、孔径3μm以下のフィルター、好ましくは1.0μm以下のフィルター、さらに好ましくは0.45μm以下のフィルターにて十分濾過することが好ましい。フィルターの濾過に先立って、遠心分離によって大きな粒径のものを除くこともでき、これによってフィルターによる濾過における目詰まりを少なくし、フィルターの使用期間が長くなる。

50 【0017】水性の液体としては、水および必要に応じて水性溶剤を用いることができる。水としては、金属イ

オン等を除去したイオン交換水ないし蒸留水を用いることができ、水は記録液中に50～98重量%の範囲で含まれることが好ましい。水性溶剤は、記録液のノズル部分での乾燥、固化を防止し、記録液を安定して噴射させ、保湿剤としても働くものであり、単独または混合して記録液中に0～25重量%の範囲で用いることが好ましい。

【0018】水性溶剤としては、エチレングリコール、ジエチレングリコール、プロピレングリコール、トリエチレングリコール、ポリエチレングリコール、グリセリン、テトラエチレングリコール、ジプロピレングリコール、ケトンアルコール、ジエチレングリコールモノブチルエーテル、エチレングリコールモノブチルエーテル、エチレングリコールモノエチルエーテル、1, 2-ヘキサンジオール、N-メチル-2-ヒドロキシン、置換ビロリドン、2, 4, 6-ヘキサントリオール、テトラフルフリルアルコール、4-メトキシ-4メチルベンタノン等を例示できる。また、記録液の乾燥を速める目的においては、メタノール、エタノール、イソブロビルアルコール等のアルコール類も用いることができる。

【0019】本発明のインクジェット用記録液は、被印刷体への定着性を強固にするため、水性樹脂を含むことが好ましい。水性樹脂は、処理顔料の分散性にも寄与する。なお、被印刷体がインキ受理性を有する場合には、水性樹脂は不要ない。水性樹脂としては、水に溶解する水溶性の樹脂や、水に分散する水分散性のエマルション樹脂、コロイダルディスパーション樹脂が、それぞれ単独ないし混合して用いられる。水性樹脂として具体的には、アクリル系、ステレンーアクリル系、ポリエステル系、ポリアミド系、ポリウレタン系、フッソ系等の水溶性樹脂および水分散性樹脂が挙げられる。

【0020】被印刷体への定着性を目的とするときは、水性樹脂は、記録液中に0.1～10重量%の範囲で用いられることが好ましい。この量よりも少ないと、顔料を強固に定着できない。また、この量よりも多くなると、記録液の粘度が上昇しそうに吐出安定性が低下したりするようになる。なお、水性樹脂として水溶性の樹脂を用いた場合、記録液の粘度を高くする傾向があるが、水分散性の樹脂では粘度を低く抑えることができたり、また、記録物の耐水性をより向上させることができる。水性樹脂を用いる場合には、アンモニア、アミン、無機アルカリ等の中和剤を加え、水性樹脂の溶解ないし分散の安定性を調整することが好ましい。

【0021】本発明のインクジェット用記録液には、分散剤、表面張力、浸透の調整剤、防黴剤、キレート剤、消泡剤等の添加剤を必要に応じ配合することができる。分散剤は、顔料の安定な分散を維持させるため、あるいは水性樹脂を分散剤の用途で使用できない時、あるいはさらに安定な分散をさせるために用いることができる。分散剤としては、アニオン性、非イオン性、カチオン

性、両イオン性の活性剤を用いることができる。

【0022】アニオン性活性剤としては、脂肪酸塩、アルキル硫酸エステル塩、アルキルアリールスルホン酸塩、アルキルナフタレンスルホン酸塩、ジアルキルスルホン酸塩、ジアルキルスルホコハク酸塩、アルキルジアリールエーテルジスルホン酸塩、アルキルリン酸塩、ポリオキシエチレンアルキルエーテル硫酸塩、ポリオキシエチレンアルキルアリールエーテル硫酸塩、ナフタレンスルホン酸フォルマリン縮合物、ポリオキシエチレンアルキルリン酸エステル塩、グリセロールボレイト脂肪酸エステル、ポリオキシエチレングリセロール脂肪酸エステル等が例示できる。

【0023】非イオン性活性剤としては、ポリオキシエチレンアルキルエーテル、ポリオキシエチレンアルキルアリールエーテル、ポリオキシエチレンオキシプロピレンブロックコポリマー、ソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンソルビトール脂肪酸エステル、グリセリン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンアルキルアミン、フッ素系、シリコン系等の非イオン性活性剤が例示できる。

【0024】カチオン性活性剤としては、アルキルアミン塩、第4級アンモニウム塩、アルキルビリジニウム塩、アルキルイミダゾリウム塩等が例示できる。両イオン性活性剤としては、アルキルベタイン、アルキルアミノキサイド、ホスファジルコリン等が例示できる。

【0025】記録液の被印刷体が紙のように浸透性を有するときには、記録液の浸透をやめ、見掛けの乾燥性を早くするため浸透剤を加えることができる。このような浸透剤としては、水性溶剤として例示したジエチレングリコールモノブチルエーテル等のグリコールエーテル、アルキレングリコール、アルキレンジオール、ポリエチレングリコールモノラウリルエーテル、ラウリル硫酸ナトリウム、ドデシルベンゼンスルホン酸ナトリウム、オレイン酸ナトリウム、ジオクチルスルホコハク酸ナトリウム等を用いることができる。浸透剤は、記録液の5重量%以下の使用量で十分な効果があり、これよりも多いと印字の滲み、紙抜け（プリントスルー）を起こし好ましくない。

【0026】防黴剤は、記録液への黴や細菌の発生を防止するために添加することができる。防黴剤としては、デヒドロ酢酸ナトリウム、安息香酸ナトリウム、ソジウムピリジンチオナー-1-オキサイド、ジンクピリジンチオナー-1-オキサイド、1, 2-ベンズイソチアゾリン-3-オノン、1-ベンズイソチアゾリン-3-オノンのアミン塩等が用いられる。これらは、記録液中に0.05～1.0重量%の範囲で含まれることが好ましい。

【0027】キレート剤は、記録液中の金属イオンを封鎖するものであり、ノズル部での金属の析出や記録液中の不溶解性物の析出等を防止するために加えることが

できる。キレート剤としては、エチレンジアミンテトラアセティックアシド、エチレンジアミンテトラアセティックアシドのナトリウム塩、エチレンジアミンテトラアセティックアシドのジアンモニウム塩、エチレンジアミンテトラアセティックアシドのテトラアンモニウム塩等が用いられる。これらは、記録液中に0.005~0.5重量%の範囲で含まれることが好ましい。

【0028】また、記録液のpHを調整し、記録液の安定ないし記録装置中の記録液配管との安定性を得るために、アミン、無機塩、アンモニア等のpH調整剤、リン酸等の緩衝液を用いることができる。また、記録液の吐出時あるいは配管内部での循環、移動、あるいは記録液の製造時の泡の発生を防止するため消泡剤を添加することもできる。さらに、顔料の色相の調整、濃度の付与等を目的として、耐水性、耐光性に問題の無いような形で染料も使用できる。染料の使用によっては、顔料の分散安定性を悪くすることもあるので、顔料の40重量%以下、好ましくは25重量%以下の使用に止める必要がある。

【0029】染料としては、分散染料、油溶染料の水不溶性染料、直接染料、酸性染料、塩基性染料等をレーキ化により不溶化したもの、反応性染料、含金属染料等が用いられるが、無機塩の除去された精製染料が好ましい。染料として具体的には、C.I.ダイレクトブラック17, 19, 32, 51, 71, 108, 146, 154, 166, C.I.アッドブラック2, 7, 24, 26, 31, 52, 63, 112, 118, C.I.ベーシックブラック2, C.I.ダイレクトブルー6, 22, 25, 71, 90, 106, C.I.アッシュブルー9, 22, 40, 59, 93; 102, 104, 113, 117, 120, 167, 229, 234, C.I.ベーシックブルー1, 3, 5, 7, 9, 24, 25, 26, 28, 29, C.I.ダイレクトレッド1, *

処理例	顔料(量)	溶剤(量)	温度	スルホン化剤(量)	時間
1 P.B.	2部	スルホラン	120部	スルホミン酸	3部 3
2 15:3 ¹	2部	スルホラン	140部	スルホミン酸	3部 5
3 19 ²	2部	ピリドン ^{**}	100部	スルホミン酸	3部 5
4 P.Y.	2部	スルホラン	120部	スルホミン酸	2.5部 3
5 19 ²	2部	スルホラン	100部	スルホン化ビリジン塩	1.5部 3
6	2部	スルホラン	150部	スルホミン酸	3部 3
7 P.Y.	2部	スルホラン	140部	スルホミン酸	3部 4
8 138 ^{**}	2部	スルホラン	150部	スルホミン酸	3.5部 3

【0033】*1 銅フタロシアニンブルー

*2 ジメチルキナクリドン

*3 キノフタロン

*4 N-メチル-2-ピロリドン

【0034】(水性樹脂の合成例) アクリル樹脂の合成

MMA	EA	MAA	分子量
合成例1	1	0.5	0.5 10000

*4, 17, 28, 83, C.I.アッシュレッド1, 6, 32, 37, 51, 52, 80, 85, 87, 92, 94, 115, 180, 256, 315, 317. C.I.ペイシックレッド1, 2, 9, 12, 13, 14, 37, C.I.ダイレクトエロー-12, 24, 26, 98, C.I.アッシュエロー-11, 17, 23, 25, 29, 42, 61, 71, C.I.ペーシックエロー-11, 28. C.I.ダイレクトオレンジ34, 39, 44, 46, 60, C.I.ダイレクトバイオレット47, 48, C.I.ダイレクトブラウン109, C.I.ダイレクトグリーン59, C.I.アッシュオレンジ7, 19, C.I.アッシュバイオレット49, C.I.ペーシックバイオレット7, 14, 27等が例示できる。その他の添加剤として、尿素、ジメチル尿素等を加えることもできる。

【0030】記録液は、記録装置の方式にもよるが、粘度0.8~1.5センチボイズ(25°C)の液体として調整することが好ましい。記録液の表面張力は25~60dyn/cmが好ましく、pHは特に制約されないが4~12の範囲であり、処理顔料の分散安定性からは7~10のアルカリ性が好ましい。

【0031】以下、実施例に基づいて本発明を説明する。例中、部および%とあるは、重量部および重量%をそれぞれ示す。

(有機顔料の処理例1~8) 表1に示す条件で、以下のように有機顔料を処理した。有機顔料を溶剤に分散させ、加熱したのち、スルホン化剤を添加し、攪拌しながら維持した。ついで、溶剤にて数回洗浄後、水中に注ぎ、再度水洗を繰り返し、フィルターにて処理顔料の水性分散体(固体分15%)を得た。

【0032】

【表1】

法に従い、メチルメタクリレート(MMA)、エチルアクリレート(EA)、メタクリル酸(MAA)を下記のモノマー組成(モル比)で共重合し、3元共重合体を合成した。

2	1	1.0	2.0	20000
3	1	2.0	1.0	20000
4	1	2.0	3.0	25000
5	1	3.0	1.0	28000
6	1	3.0	0.5	18000

【0035】(実施例1～12) サンドミルに、表2に示す原料を、表2に示す配合比(重量比)で充填し、3～4時間の分散を行った。しかるのち、10000 rpmの遠心分離を行い、0.45 μのフィルターにて滤過*し、インクジェット用記録液を作製した。

【0036】

【表2】

記録液	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
処理剤	実施例1 2 3 4 5 6 7 8	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
分散剤	分散剤1 2 3		1 1 0.5 0.5		1		1 1	1 1	0.5 0.5		1	
樹脂	合成樹脂1 2 3 4 5 アクリル樹脂1 2 3 4 アクリル樹脂5		0.2 0.3 0.2 0.1 0.2				0.2 0.3	0.2 0.2			0.1	
中和剤	中和剤1 2 3	0.1 0.1 0.1	0.1 0.1 0.1	0.1 0.1 0.1	0.2 0.2 0.2	0.1 0.1 0.1	0.1 0.1 0.1	0.1 0.1 0.1	0.1 0.1 0.1	0.1 0.1 0.2		
湿润剤	湿润剤1 2	9 10	10 10	10 10	10 15	9 10	10 10	10 10	10 10	10 10	15	
溶剤	溶剤1 2 3	1 1 1			1 1	1 1				1		
水	イオン交換水	85 85 85 85 85 80	85 85 85 85 85 85	85 85 85 85 85 80								
防黴剤	防黴剤1 2	0.3 0.3	0.3 0.3	0.3 0.3	0.3 0.4	0.3 0.3	0.3 0.3	0.3 0.3	0.3 0.3	0.3 0.3	0.3 0.3	
キレート剤	EDTA	0.03 0.03	0.03 0.03	0.03 0.03	0.03 0.05	0.03 0.03	0.03 0.03	0.03 0.03	0.03 0.03	0.03 0.03	0.03 0.03	

【0037】分散剤1 花王社製ノニオノン系活性剤「エマルゲン420」

分散剤2 花王社製ノニオノン系活性剤「エマルゲンA-90」

分散剤3 ゼネカ社製ノニオノン系分散剤「ソルスパース27000」

アクリル樹脂1 日本ポリマー社製アクリル樹脂エマルション「W-251」 固形分40%

アクリル樹脂2 岐阜シェラック社製アクリル樹脂エマルション「エマボリーTYN-50」、 固形分44%

アクリル樹脂3 ジョンソンポリマー社製アクリル樹脂水溶液「ジョンクリル62」、 固形分31%

アクリル樹脂4 ジョンソンポリマー社製アクリル樹脂水溶液「ジョンクリル61J」、 固形分31%

【0038】中和剤1 ジメチルアミノエタノール

中和剤2 ジエチルアミノエタノール

中和剤3 モノエタノールアミン

湿润剤1 グリセリン

湿润剤2 エチレングリコール

溶剤1 イソプロピルアルコール

溶剤2 エチルアルコール

溶剤3 N-メチル-2-ピロリドン

防黴剤1 ゼネカ社製「プロクセルGXL」

防黴剤2 オーリン社製「ソジウムオマジン」

キレート剤 エチレンジアミンテトラアセティックアシドナトリウム塩

【0039】実施例で得られた記録液について、下記の方法で分散性を評価した。また、実施例で得られた記録液をインクジェットプリンター(エプソン社製「MJJ700V2C」)のカートリッジに入れて記録を行い、記録物の耐水性、耐摩擦性、耐光性を下記の方法で評価した。結果を表3に示す。さらに、実施例で得られた記録液を-40°Cで一週間保存後、自然解凍したところ、初期の粘度を維持しており、安定な噴射特性を示した。また、50°Cの恒温槽で1月保存したところ、初期の粘度を維持しており、安定な噴射特性を示した。また、-4

0°C 7時間、室温7時間、50°C 7時間のサイクルを3回繰り返して行ったところ、初期の印字特性および記録液の物性値を維持していた。

【0040】耐水性 コピー用紙「Xerox 4024」に印字、6時間放置後、水道水中に5分浸漬し、試験前後のOD値を測定し、残存した率を示した。

耐摩擦性 アート紙にベタ印字した記録物を湿った綿棒にて3回こすったときの印字部の変化を目視にて評価した。

耐光性 塗工合成紙に印字ラミネート後、フェードメーターで500時間曝露し、曝露前後の色差を求めた。

分散性 記録液を50°C 7日間保存後の粒子径の変化を測定した。

良：15nm未満の変化

不良：15nm以上の変化

【0041】

表3

	耐水性	耐摩擦性	耐光性	分散性	ΔE	
記録液1	99	一部とれ	3.2	良		20
2	98	良	3.5	良		
3	99	良	3.7	良		
4	100	良	2.8	良		
5	101	良	2.6	良		
6	97	良	3.4	良		
7	99	一部とれ	3.7	良		
8	99	良	4.1	良		
9	98	良	3.6	良		
10	99	良	3.5	良		
11	97	良	3.4	良		
12	99	良	3.5	良		30

【0042】

フロントページの続き

(72)発明者 飯田 保春

東京都中央区京橋二丁目3番13号東洋イン
キ製造株式会社内

【発明の効果】本発明の記録液は、顔料を水性の液体に分散した分散型のインクジェット用記録液でありながら、分散性が安定しており、ノズルでの吐出安定性が良好なため、オフィスにおける書類の作成、ダンボールのマーキング、ナンバリング、バーコード等の分野、オーデマンド印刷、簡易印刷の分野にて利用することができる。